

年中行事の認知と実施状況の年齢層による変化

○真部真里子* 橋本慶子**

(*同志社女大, **青山女短大)

〔緒言〕年中行事、中でも農業社会における共同体が有する「子孫繁栄」「豊年満作」などの共通意識（価値観）に基づく行事は、本来、変化を受けにくい習俗と考えられてきたが、近年の生活速度の高速化、環境の変化等によって、変わらざる側面を持ちつつも、宗教・民俗的意義の喪失、ファッション化などによる衰退が見えはじめた。そこで、年齢層による年中行事の認知と実施状況の差異について検討を行った。

〔方法〕1996年1月青山学院女子短期大学家政学科在学生ならびに東京近郊在住の同短期大学卒業生259名を対象に、年中行事に対する意識と実施状況についての質問紙調査を実施した。各調査項目について単純集計し、必要に応じてt検定を行った。

〔結果〕調査した25種の年中行事について、平均 21.4 ± 1.9 件の行事を認知していたが、調査前1年間に各家庭で実施された行事は平均 11.9 ± 4.1 件であり、知っていても家庭では行わない行事が半数近くあった。回答者の年齢層別に検討したところ、年中行事は、1. 全年齢層で実施、2. 高年層の実施率は高いが若年層で実施率が低下、3. 高年層の実施率は高いが若年層で実施・認知率が低下、4. 全年令層で実施率が低く認知率も若年層では低下、5. 全年令層で実施率が低く認知率も高年層では低下、6. 若年層で実施率が上昇、の6群に分類された。また、年中行事の認知数は、45才を境に、若年層で顕著に低下し、実行数は、65才以上、35～64才、35才未満の3つに群別され、段階的に若年層ほどその実行率が低下した。これは、各年齢層の幼少・青年期の時代背景や現在の家族構成が影響しているものと推察される。